「主にあって」

ピリピ４：１―５

堀田修一　２２・２・１３

Ⅰ「主にあって堅く立ってください」：１→３章を受けて。

１．「私の愛し（原語：愛される、かわいい、大事な。この愛はどこから→まず愛して下さる神から→「神に愛されている人々」ローマ１：７、Ⅰテサロニケ１：４）慕う（原語の動詞形：「神が私たちのうちに住まわせた御霊は、熱くねたむほどに私たちを慕っておられる」ヤコ４：５）兄弟たち、私の喜び（兄弟姉妹は、喜びの存在）冠よ」：１。

２．弱い私達は、困難な中で自分の力では堅く立つ事はできない。それ故に、「主にあって」とある。素晴らしい！主にあって＝主としっかり結ばれ（御聖霊により）、主につながり主から命の養分をいただき続けながら、主に拠り頼んで。「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたにとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません」（ヨハ１５：４）。「主にあって（主と結びついている恵みにより）堅く立ってください」：１。励まし→「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです」（ローマ１４：４）。倒れ易い私達を立たせて下さるのは主。私達の分は→主からの力と愛と思慮分別が流れてくる霊的なパイプをつまらせている自分の罪を悔い改め、立ち上がらせて下さる主にしっかりつながり続ける、留まり続ける事。※花壇への水。

Ⅱ「主にあって一致してください」：２。

ピリピ教会内に不一致があった。不仲であった二人の婦人、ユウオデヤとスントケ。二人とも福音の為に一生懸命戦ってきた人々。気を付けよう。主からの熱心は良いものだが、人間的な熱心は、人をさばいたり、弱い人を責めたり、やり手の人と競争したり、人の領分を侵したり、支配権を争って奪おうとする。人を支配する人からは、人の心は離れて行く。人の分と自分の分を認め合う愛がないと、些細な事でぶつかったり、根に持ってしまったりする。祈ろう。互いに支配せず（愛をもって「はいといいえ」を言い合える関係作り）、互いの分、違いを認め合い、神に造られ神に愛されている人として尊敬し合う事ができるように。支配的な人には、主から愛と勇気をいただいて、愛をもって健全な「ノー」も健全な「はい」も言えるように。支配的な人に「このままなら、多くの人が、心があなたから離れて行きます。あなたに「はいといいえ」を言う人格があるように、相手にも「はいといいいえ」を言う人格がある事を認めて下さい」と祈りつつ愛を持って助言する→「ほんとうに、真の協力者よ（片方の人につくのではなく、公平、真実な主につく）。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください」：３。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい（造りなさいではない。一致を造るのは神のみ、神の分。私達の分は保つ事）」（エペソ４：２，３）

Ⅲ「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」：４。

１．私達の力では、いつも喜ぶ事はできない。しかし、ここでも「主にあって」と言われている。辛い中、苦しい時も主にしっかり繋がっているなら、主の恵みを数え感謝し、主ご自身と主の愛、炭より黒い心の罪が赦された喜び（応答の賛美）、主の恵みを喜ぶことができる。パウロが、「主にあって喜びなさい」と言う時、彼が恵まれた環境の中にいたのではなく、ローマの獄中にいた事を思い出す時、大いに励まされる。主にある喜びは、苦しい環境の中でも与えられる。主の救い、愛、御教えの御目的＝「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです」ヨハ１５：１１。だから、繰り返し語られる「もう一度言います。喜びなさい」：４。喜びの真の土台は、気分や感情ではなく、主の御言葉、主の恵み、主の変わらない愛。

２．真の喜びとは、私達が無条件の愛をもって神に愛されている恵み、赦され素晴らしい救いをいただいている恵み、私達への神の愛を何ものも（病気、挫折、苦しみ、圧政、死、コロナも）取り去る事ができない事を知る体験。真の喜びとは、幸せな気分と同じではない。私達には感情が与えられているので、色々な事で幸せな気持ちになれない事が当然ある。にもかかわらず、なくならない喜びがある。主にある真の喜びは、神が私達を愛されている恵み、救われている恵みを知っている事から来る。ピリピ３：８。私達の喜びは、すべてが自分の願い通りになっている事が条件ではなく、主の救い、主の愛、主が共におられる恵み、主ご自身を喜ぶ喜びが土台。だからいつも主にあって喜びがある。苦しみがある時は、喜ぶ事はできないと考えてしまう。しかし、主を中心に据える、主としっかり繋がっている主にある人生では、苦しみと喜びは同時に存在し、共存する。Ⅰペテロ１：６。しかし、このような歩みは、自動的、ただ受け身の姿勢で起こるのではない。喜びは選び取る必要がある。日々それをし続ける事が必要。喜びは私達の選択の実。何を選ぶかが重要。申命記３０：１９。「どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える」ヨシュア２４：１５。※ステパノも殉教者も喜びつつ天に召された。

３．私達は、喜びとか悲しみは、人生の境遇如何によると考えてしまう。しかし、私達は自分の人生に起こる出来事を選べなくても、その境遇にどう対処するかは選ぶことができる。二人の人が同じ事故に会う。一方の人は恨み、片方の人は感謝の心を持つ事がある。辛い出来事で、ある人を恨み続ける事、不平不満を選ぶか、その出来事の中にも神の深いご計画がある事を認めて主と共に生き、主を喜び、主の恵みを数えて感謝する事を選ぶか？今を恨みの根をはやす時として生きるか、主にある喜びを引き出す時として生きるかの選択がいつもある。その良き選択を助けて下さる御聖霊は私達の知性（考え方、物事の捉え方）、感情、意志をコントロールして下さる。御聖霊に拠り頼もう。「御霊の実は、愛、喜び、平安」ガラ５：２２。毎日、どこかで、しばらく時間を取り、主と交わり、主の恵みを数え、主にあって喜びを選択する大切な時を持つことは幸い。と同時に、悲しく泣きたいときは、主の前に心を注ぎ出して泣こう。主は、私達の悲しみ、涙を受けとめて下さる。「私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。しかし主は『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときこそ、私は強いからです」Ⅱコリ１２：８－１０。

４.「あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。主は近いのです」：５。主と主の愛と恵みを思い起こし心で味わう時、私達の心に寛容な心（苦しい時もイライラしない、広い心、優しい心で人と接する。苦しみが長引いても寄り添う愛）が主から与えられる。その寛容な心は、接するすべての人に伝わり知られ、「それは私の愛ではなく、イエス様から愛をいただいているおかげです」と主を証しするチャンスとなる。※ある方の言葉。いつも喜べるのは、恵みとまことに満ちた「主は近い」存在だから。主は、いつも近くにおられる。主が、再臨される日が近づいているから。本日の応答の賛美聖歌４５８「きみ（主）のもとに行ったときに、重荷はすべて去り、今はただイエス様を信じ喜び限りなし」。

祈り：コロナの試練、苦しみという試練の中で、失望、落胆、不平、不満に支配される事が無く、主にしっかり繋がる信仰を増し加えて下さい。どんな苦しみの中でも主と主の愛を喜ばせて下さい！